

### 二三 幕府殉死停止に付被仰出

御用之旨に付、昨廿三日令登城候之處、諸大名不殘御前に被召出、御仕置御條目跡々に替儀無之候得共、唯今改被仰出候條、彌可相守其趣旨上意候。入御之後春齋御條目讀終之、保科肥後守殿・松平式部大輔守殿列座にて、酒井雅樂頭殿を以、世間追腹切候事無故儀被思召候。向後急度可被停止候。若相背者候はゞ主人可爲越度候。主人子有之、追腹之もの於不申留は、猶以不屈之仕合候之間、可存此旨之由被仰出候。右上意之趣下々迄忝儀候。則御條目之寫、殉死御停止御書出之寫共二通遣之候。人持之面々・組頭・物頭、二之丸に召寄可被申渡候。内々我等家中令停止度存候之處、結構成被仰出之上は、彌以家中末々迄令禁止候。若相背此旨追腹切候もの有之候はゞ、品により其主人跡目申付間敷之條、堅可被申聞候。以上。

（寛文三年）  
五月廿四日

加賀綱利御判

前田三左衛門殿  
長九郎左衛門殿

横山左衛門殿  
前田對馬殿  
奥村河内殿  
小幡宮内殿  
今枝民部殿

覺

殉死は古より不義無益之事なりといましめ置といへども、仰出無之故近年追腹之もの餘多有之。向後左様之存念可有之者には、常々其主人より殉死不仕候様に堅可申含候。若以來於有之は、亡主不覺悟越度たるべし。跡目之息も、不令抑留儀不屈可被思召者也。

### 二四 鐵炮稽古之儀御定

犀川櫻島之下がけ、淺野川觀音山之下兩所にて、御家中之者共井又者等鐵炮稽古仕、居屋敷之外於所々鐵炮打候儀堅御停止候之間、此旨御組中可被仰觸候。以上。

寛文三年六月三日

### 二五 跡目之儀御定

覺

一、御家久敷者之跡目、無相違可被仰付候。但、其親不屈之仕合有之は格別之事。  
一、新參者、其身奉公次第跡目可被仰付事。  
一、養子之儀加賀守様立御耳、御意を以被仰付ものは、實子可爲同前事。  
一、跡目不被仰付者并減申者、正月より六月迄之内死去候ば、其年之知行物成少も被下間敷候。七月・八月・九月之内死去候はゞ、半物成可被下候。十月・十一月・十二月死去候ば、物成不殘可被下事。

以上

萬治元年十一月二日

遺書上候刻、死去人何代先より御家に罷在、祖父・親知行、高借銀有無、其身御奉公之品、せがれ歳附、并一類附、只今御奉公仕罷在候者之知行高、御合力米等委細書付、遺書

共拙子共相渡、今枝民部方迄可致添書旨被仰出候之間、各可被得其意候。以上。

萬治元年十二月六日

前田對馬  
奥村因幡  
津田玄蕃

覺

御家中由緒書等差上之候刻、親類縁者之内義絶之者除之候儀如何敷候。左様之子細有之分は、猶以被聞召度事候間、自今以後交名等不殘書載之、肩書に其意趣可記之由被仰出候條、可被得其意者也。

（延寶六年）  
午九月廿七日

御家中一類附書上申刻、義絶之者有之候ば、其段可書載旨以御書出就被仰出、寫遣之候。可被得其意候。恐々謹言。

延寶六年十月十九日

本多安房  
奥村因幡  
前田對馬